
インフィニティ。

雲霧 柚留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニティ。

【Nコード】

N4667L

【作者名】

雲霧 柚留

【あらすじ】

誰もから見捨てられ、悲しくさまよっていた「LV8」のアス力。しかし、薫達に出会い、兵部に会い、恋に落ちて行くという話。最初は切なくて、後は甘いです。

設定（前書き）

少し可愛そうなよーじょ設定。
（幼女じゃないが）

設定

新しいシリーズ。てか作りすぎだっ！一応、いろんな設定を。

名前・月影 アスカ

性別・女

年齢・見た目は7歳だが、実は12歳

身長・栄養失調のため、薰より低い

京介からの呼び名・リトルプリンセス

ノーマル？エスパー？・エスパーLV 7より上（LV8）

能力・サイコキノサイコメトリー テレポート ヒーリングレ

ストレーション etc・・・

説明・元はLV2だったが、親戚（おじ、おば）の暴力から覚醒。

近所からも不安がられ、エスパーの子供を持つおばさんが通報、暴れてあと少しで親戚を殺すかも！という時にESM作動、BABE Lに無事保護された。

しかしショックからか誰とも口をきかない。PANDRAにクイーン（薰）の次に狙われている。

ESP検査を受けると、機械が爆発する。リミッターはネックレス。母親もLV8の複合能力者だったため、ぴったり合う。話は保護されて、局長室にいるところから始める。

なんか書きたくなったんです。これはちなみに、兵部寄り兵部落ちとなっております。

「力」なんていらなかった（前書き）

悲しいです。地味に。

「力」なんていらなかった

BABEL内の局長室・・・

「柏木クン、その子が今日のエスパ―事件の犯人だネ？」

「はい、そのようにと。一応管理管を呼びますか？」

「うん、一応呼んで置いてくれ。リミッターをつけてはいるが、故障していたらいけないからネ。」

「チルドレンがそばに居るみたいですので、呼びますね。」

なんで、なんでこんなところに居るの？怖い・・・怖い！あの二人、ノーマルだ。また、おじちゃんが私を売ったんだ！もういやだ、兵器として使われるのは！

なんで？何で私はエスパ―なの？みんなに軽蔑されるの？

『お前は兵器なんだ！おとなしく言うことを聞け！』

『汚らしいエスパ―め！さっさと死んじまえ！！』

『お前の母さんも汚らしいエスパ―だったなんてな！』

『あん？主人の言うことが聞けねえのか犯罪者エスパ―！』

チガウチガウチガウ・・・！私は犯罪者じゃない兵器じゃない汚らわしくない

お母さんは・・・悪くない・・・

隠れなきゃ！

テレポート？だめ、ECMがかかってる！しかも強力でLV2の力しか出せない！

あ、ソファアの後ろだ！

タタタタタ・・・サツ

怖いよ・・・お母さん！私、エスパーなんかに生まれたくなかった。

ノーマルに生まれてたら・・・どんなに・・・

「おや、隠れてしまったようだね。」

「無理ありません・・・あの子、実の父に暴行を受け、母親と父親が亡くなった後、おじとおばに預けられ、何回もエスパーを兵器として扱う人に売られ、おじに頭を殴られたとき、超能力中枢がなんらかの理由で発動し、もとLV2だったのが7にまで跳ね上がったんですから。」

シュン

「局長！」

「なにか用事か？」

「手当て、出るんでしょうね？」

「局長、何のご用でしょうか？」

「うむ、そのソファアの陰に居る女の子の事なんだが・・・」

「ほんまや、後ろに女の子がある。でも、すごい震えとる・・・」

「事情は、柏木クンが・・・」

「あの子は・・・【中略】それで人を信じなくなったらしいの。名前はもちろん、声すら聞き出せないわ。薫ちゃん、お願いできる？」

あの子はリミッターをつけてるみたいだけど、複合能力者だから、油断しないでね。」

「オツケー！」

「うちも協力するわ！な？」

「私も！」

「じゃあ、やるか！」

だあれ・・・？女の子が3人？どうでもいいや

私、もうどうでもよくなった。もう苦しくあがくより任せたほうが
いいって知ったから。

もういい

『エスパー』として嫌な人生を送るより『兵器』として扱われたほう
が

大切にしてもらえるから、もうそれでいい

「おい、出て来いよ！」

『あんたなんか要らない、出ていきな！』

「大丈夫や、外に出てきて。」

『大丈夫、すぐには帰さねえからさ！』

「私たちは貴方の味方よ！」

『俺たちはお前の敵、「普通の人々」だ！』

いやな思い出が蘇る。ずっと、昔の事を。

零「いやあああああああつ！！！！！」

バキ！メシメシッ！

「な、何が起きたの！？」

「管理官！早く！」

「わ、わかったわ！」

「いやあああつ！」

「落ち着け！何もしやしないから！」

「そう言つて傷つけてきたのは誰！？もう人なんか信じない！貴方たちはいいわね！小さいころから大事にされてきたんでしょ？人々からも普通のエスパーとみてもらえて！私はね！ずっと一人ぼっちだったのよ！兵器として扱われたのよ！実の親からも暴力を受けて・・・私の味方なんてお母さんしか・・・居なかったんだから・・・」

「そんな・・・そうやけど・・・」

「大丈夫だよ、すぐみんなと仲良くなれるよ。」

「お前なんか、大っ嫌いだ！」

「！！！」

局長室はだんだん崩れていく。暴れる様子は、まるで昔の薫の様。

（思念波・・・？いや違う、これはあの子の「悲しみ」「怒り」「恐怖」）

チュッ

不二子はためらいながら、キスをして、零のエネルギーを吸い取り、気絶させた。

「ふー・・・疲れちゃった。」

「薫・・・大丈夫か？」

薫はうつむいて、涙を流していた。

「とにかく、透視してみるわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・頼む」

薫の涙は珍しかった。涙を流すなんて、キャリアの事件以来だ。

「わかったわ。この子の名前は、月影 アスカ。LVはもともと2
だったのがLV7・・・いや、それ以上かもしれないわ。」

「とりあえず、あとで賢木にでもESP検査をさせます。」

「チルドレン、新しい任務だヨ」

「!？」

「・・・・・・・・なに？」

「この子の、友達になってくれないか？」

「無理や!そんなん・・・」

「頼んだヨ。ワシはすぐに修理費用を搾り出さなきゃいけないから
ネ。」

「・・・・・・・・めっちゃ怖い目つきやったなあ・・・」

外・・・。

「へえ、面白い子じゃないか・・・。」

「マタPANDRA二仲間ガ増エルノ力？」

「ああ、たぶんね」

誰も信じないだから私は心を閉ざす
もう、何も見たくない、感じたくない
心の中でひっそりと生きるわ

続く

「力」なんていらなかった（後書き）

なんか最初から・・・フウ

心の中のもう一人の私。
(前書き)

賢木たちががんばります

心の中のもう一人の私。

アスカは特別ESP用の部屋で眠っていた。もう数日は目を覚ましていない。

「ばーちゃん、エネルギー吸い過ぎたんじゃねえのかよ?」

「全然起きん・・・普通エネルギー吸い過ぎでも、直るはずやで?」

「あのね、この子、心を完全に閉ざしたの。」

「そう。最後に残した言葉。エネルギーを吸う時に聞こえたわ。」

「ごめんなさい」「もう暴れません」「どうか許して」

「最後に、「あんな事言つてごめんね、薫ちゃん」「」

「私の名前・・・」

「あのぶつかった時、サイコメトリーで読んだみたい。」

「これじゃ、許さんわけにはいかへんね、薫?・・・薫!」

薫の目からは、大粒の涙が落ちていた。

「ごめん・・・私アスカちゃんのこと、ごめん・・・」

薫は、その後、泣き疲れてしまったらしく、眠っていた。

「フワア・・・薫ちゃん送ってくるねえ・・・」

「あ、うちも帰るかな。紫穂、行こ。」

「そうね。」

シュン

「やあ、僕の愛しい、小さく、可愛い姫君リトルプリンセス、心を閉ざしてしまったのかい？困ったな。」

「連レテ行クノカ？」

「やめておくよ、クイーンたちが怒りかねないしね。」

誰？私のそばで話しているのは？私はもうだれも信じない・・・お母さんがそう言ったから。

誰かここに来て・・・そしたら信じてあげる

「ひよおおおぶきようすけえええ！！！」

「不二子さん、急いできたから化粧が荒いぜ？」

「そんなのどうでもいいわ！アスカちゃんに何をするつもり！？」

「今は目が覚めないみたいだね・・・」

ちゅ

「王子のキスで小さい姫リトルプリンセスが目覚める・・・ありえなくないかい？」

「ろ・・・ロリコンね。」

「僕はロリコンじゃない！後、この子本当の年は12歳だよ。」

「うそつ、7歳か6歳にしか見えないわ！」

「本当ならクイーンたちと一緒に学校に行ける年だったんだ」

「でもこの子は・・・」

「知ってるさ。このこの心を開くには、「サイコダイブ」を使うしか手はない」

「なん・・・ですって！」

「手伝いたいけど B A B E Lのみんながうるさいだろ？じゃあね。不二子さん。」

シュン

「とりあえず修二を呼ばなきゃ・・・」

「わかりました。谷崎主任の時の様にやればいいんですね。」
「管理管もすぐ行きますから・・・」

特別室

「行きますよ、管理官！」
「サイコダイブ！」

零の心の中

「この泡は・・・記憶？」
「どす黒いのは嫌な記憶のようね」
「これは最近の・・・」

それは、アスカがESPで、おじとおばを痛めつけるところだった。

「うつ・・・」

（痛めつけたくなかったの暴走しただけなの）

「誰!？」

（私はもう一人のアスカ。名前はアスミ）

「暴走・・・?」

（私はおじちゃんに殴られたとたん、ESPがLV2からLV7に跳ね上がったの）

「何ですって!？」

（この世にLV7以上などない、学者はそういった。）

「まさかあなたは!」

（そう、私は未来の予言にかかわる【LV8】の女の子）

「LV・・・8!？」

（LV7以上は、いないと思われてきた、でもいたのよ、LV8の人がね）

「それは誰!？」

「もしかして!」

（そう、私の愛するお母さんが日本にもほとんどいないLV8のエスパー。潜在能力っていうのかしら? 私にもエスパーの血が眠っていたなんて誰も知らなかったわ）

「何てことだ・・・予言のことは?」

（貴方にはまだ話せない、その不二子さんならまだしも・・・）

「私?」

（2人とも、もう一人の私を探しに来たの?）

「ああ、そうだ」

（アスカは今、泣いているわ。）

「薰ちゃんを傷つけたから?」

（それもあるけど、あの子は自分自身すら信じられなくなって泣いているの）

「・・・あの子は許してくれたわ。」

（なら大丈夫、この先にある丘の上で、泣いているわ・・・。）
「ありがとう・・・」

（あとね、あの子のリミッターは母からのもの。最初は渡さないと
思うけど直さなきゃ大変なことになるわ。壊れているけどデザイン
だけ残して直すことは可能よ。）

「行きましよう！管理官！」

「そうね、修二」

丘の上

寂しいよ 悲しいよ 苦しいよ 痛いよ

「誰？誰か居るの？・・・あなたは！」

「アスカちゃん！」

「ここまで来たなんて・・・帰って！もう誰も信じないわ！」

パアンツ・・・

気づくとアスカの頬は赤くなっていた。

「いい加減にしなさい！」

「・・・グス・・・」

「貴方を待つてる人がいるのよ！」

「私、薫ちゃんを傷つけた。許してくれるわけじゃないじゃない！」

「大丈夫。許してくれたわよ・・・」

「本当に・・・？」

「ええ、仲良くなりたいたって言ってたわ。」

「私のこと、兵器として扱わない？」

「うん。特務エスパーとして、生きていきなさい。」

「あ・・・ありがとう・・・グス・・・」
「ついておいで。早くみんなの元に帰りましょう。」
「取り付く暇なしてこういうことか。」
「ありがとう、賢木先生（にっこり）」
「（可愛い／＼）ちょっと目、閉じてろ。」

ちゆ

頬に触れるだけのキス。それを知るのは、管理官だけなでした。

続くVV

心の中のもう一人の私。(後書き)

地味に賢木&兵部落ちかも？

トモダチ、ダイスキ（前書き）

仲直り^^

トモダチ、ダイスキ

「動くな！クイーン・オブ・カタストロフィー！いや・・・薫！」

「熱線銃でこの距離なら、確実にやれるね・・・皆本」

「薫を撃つ気！？そんなの許さない・・・」

「アスカは早く逃げて・・・私が死んでも、エスパーとノーマルは戦いを続けるわ」

「薫、貴方は生きなければいけないわ！私一人がどうなろうと、かまわない！」

「皆本、早く撃てよ。この距離なら確實よ。」

「薫！」

「大好き・・・だったよ・・・愛してる。」

「薫！薫が死ぬなら、私も！！！」

バシユッ

20

撃たれた後には、2人の遺体が仲良く、寄り添ってるだけだった・・・

・

「いや！・・・はあ・・・はあ・・・夢か・・・」

「んー・・・なんだあ・・・？」

「なんや？何かおきたんか？」

「うう・・・ん」

「なっ、なんでもないの！夢でうなされちゃって・・・」

「なんだ・・・」

クイーン、いや薫ちゃんを助けなきゃいけないそれが私の使命なんだから。

「そつ、それにしても目、冴えちゃったね．．．ふああ．．．」

「ごめん．．．私が起こしたせいで．．．」

「別にええんで？ある意味早起きや。」

「牛乳でも飲もうかしら．．．」

「ねえ、アス力。ちよつと目覚まし「6時23分。」

「すご．．．」

「．．．あつあれ？今超能力使った実感がないのに．．．なんで時計が読めたの？」

私おかしい。どうしたんだろう．．．

続く

トモダチ、ダイスキ（後書き）

ごめんなさい中途半端で

ハジメマシテ、ヤサシイヒト

薫たちは、「がっこう」というところに行ったらしい。

私は、賢木先生とESP検査。

「じゃあ始めるぞ。カタツムリがかみそりの上を這っている。君は
そのかみそりを使いたい。どうする？」

「んー・・・何もしません。そんなかみそり使いたくないし」

「・・・じゃあ次。」

そして全部の質問が終わったところで、検査機が・・・

ポフンッ！

「機械が！」

「あわわわ……さ、サイコウォーターウォール!!」

水道の水をサイコキネシスで空中にとどめ、機械にかけた。

「（機械が壊れるなんて……やっぱり……）」

「ど、どうしよう……」

「俺が片付けるから、その辺回ってきたらどうだ？」

「そ、その辺少し回ってきます……」

キィ……キィ……

マンションの中庭のブランコに乗って、ただ揺らしている。

「どうして……みんな……私がエスパーだからって軽蔑するの？」

夕日で、零の涙も夕日色に染まった。

「みんながみんなって訳じゃないよ」

「誰？」

零の目の前には、兵部が居た。

スキニナツテシマッタノ、アナタヲ

「僕の名前は兵部京介。エスパーの天国^{パラダイス}パンドラのリーダーだよ」
「ぱん……どら……？」

「そう。なんでさっき泣いていたのかな、リトルプリンセス？」
「りとるぷりんせす……？」

「君はエスパーのプリンセスだから」

「私は……エスパーのプリンセスなんかじゃない、ただのエスパーだもんっ……」

「……違うよ」

そつと、頬に手を置かれた。

「それは君が自分を認めていないだけ」

「だって……私は……」

「もう泣かなくていい、しよいこまなくていいんだよ？」

ぎゅっ

抱きついた。精一杯の力で。

「ありがとう……」

「零ー？」

「どこにおるんやー？」

「零ちゃん」

「おっと、クイーンたちが来てしまったみたいだね、またね、リト

ルプリンセス」

ちゅ

額にそつとキスを落とされて、顔が真っ赤になった。

「あ、いたいた」

「どうしたんや？」

「顔真っ赤よ？」

「・・・やばい、恋に落ちたかもしれない」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4667/>

インフィニティ。

2010年10月15日22時42分発行